

祝！第166回直木賞受賞「黒牢城」

米澤穂信氏

今年1月に飛騨地域出身者で初となる直木賞を受賞された米澤穂信氏

作家デビューより20年、多くの受賞歴を持ち一流作家として活躍し続ける米澤氏とは…

直木賞受賞『黒牢城』の魅力と誕生秘話

『黒牢城』は戦国時代を舞台にした物語。史実に基づいた歴史小説でありつつ、さまざまな難事件の謎を解いていく推理小説であり、奥深い人間ドラマも描かれる。

個々の話はやがて全てが絡み合い、主人公たちが大きなうねりに取り込まれていく展開は圧巻。読み進むほどに歴史が動く過程を見たような感覚になる。描かれているのは「本能寺の変」の4年ほど前、摂津国有岡城（現在の兵庫県伊丹市）での約一年間の出来事で、織田信長に叛逆して籠城した城主の荒木村重が主人公だ。村重は、織田方の使者として訪れた黒田官兵衛を牢に幽閉したが、城内で起きるさまざまな事件に悩まされ、官兵衛に事件について語るようになる。

本作では、織田方の使者として、村重を窓として16世紀の日本の価値観をあぶり出し、ひとつ的小説になるのではなくかと思いました。今回、評価していくだけことは、それが成功していたということが感じ、うれしいです」。時代による価値観の差異は、氏がとても興味を持っているテーマだ。「自分にとつて当たり前だと思っていたことや常識が、時代が変わると全く違うものになってしまふことに惹かれます。端緒は、英国のエリス・ピーターズ作の歴史推理小説『道士カドフェル』シリーズを読み、そこに描かれた中世のキリスト教の世界觀に感銘を受けたことかもしれません。自分

この両者が探偵コンビのように謎解きをしていくのだが、敵対する城主と囚人という立場のため、関係性がスリリングで、ふたりの会話も、官兵衛が発するヒントとおぼしき言葉も、一筋縄ではないか。そもそも村重の叛逆の動機や官兵衛の思惑そのものが謎をはらんでおり、読み進むほどに重層的な物語に引き込まれていく。

本作について、米澤氏は次のように語



上野秀晃氏
株式会社KADOKAWA
文芸・映像事業局
単行本編集部
文芸単行本編集1課 課長
「小説 野生時代」編集長



米澤穂信氏 文学賞受賞歴

- 2001年『氷菓』で第5回 角川学園小説大賞（ヤングミステリー&ホラー部門）奨励賞を受賞しデビュー。
- 2011年『折れた竜骨』で第64回 日本推理作家協会賞 長編および連作短編集部門受賞。
- 2014年『満願』で第27回 山本周五郎賞を受賞。
- 『満願』および2015年発表の『王とサーカス』は、3つの主要年間ミステリーランキングで1位となり、2連続の三冠となった。
- 2021年『黒牢城』で第12回 山田風太郎賞ならびに、第166回 直木三十五賞、第22回 本格ミステリ大賞を受賞。『黒牢城』は4つの主要年間ミステリーランキングすべてで1位を獲得し、史上初の四冠を達成した。



作品名: 黒牢城(くろじょう)
著者名: 米澤穂信 発行元: 株式会社KADOKAWA



米澤 穂信 氏 (よねざわ ほのぶ)
1978年 岐阜県生まれ
斐太高等学校卒業
小説家 推理作家

子探偵ものになっていたでしょう。そこには村重という人物を入れることによって、村重を窓として16世紀の日本の価値観をあぶり出し、ひとつの結果に違いない。取材や下調べをしつかりと行い、最後まで緻密に物語を組み立てた上で執筆するのが氏のスタイルだが、創作に当たっては「必然に導かれて書く」感覚があるという。本作では終盤のクライマックス部分で想定外にい、動かせない文章が書けた気がします」と手応えを語る。

渾身の1作をぜひ手にとつて読んでみてほしい。

米澤穂信氏の謎

わたし、気になります！

米澤穂信氏の母校である岐阜県立斐太高等学校

同校の生徒さんからの質問に

米澤氏からお答えをいただきました

斐太高校について
どう思つて
いらっしゃいますか。

出身校だと思っていました。学校は卒業していいくものであり、卒業すれば、思い出にしまわれるものです。

高校生活は
どのように過ごして
いらっしゃいましたか。

授業を受け、放課後にはおおむね弓道部の練習に行って過ごしていました。時には学校の許可を受けてアルバイトをすることもありました。年末、スーパーで塩鮭やみかんを売ったことを憶えています。

得意科目は
何でしたか。

地学です。

斐太高校での
一番の思い出は
何でしようか。

三年生の時、文化祭の展示としてクラスでビデオ映画を撮ることになり、その脚本を書いたことです。私が初めて書いたミステリであり、脚本という形ではありましたが、一つのお話を完成させたのも初めてのことでした。

高校時代を
思い出すことは
ありますか。

高校を舞台にした小説を書くとき、何か面白いことはなかつたかと記憶を辿って題材を探すとき、思い返します。

勉強以外で
頑張ったことは
ありますか。

折々時間を見つけて、小説を書いていました。中学二年の頃から書き始めて、高校三年の秋に書き終えました。

昔に戻れるとなったら、
いつのころに戻りたいですか。

例：小学生の時、大学生の時など
あまり戻りたくないですね。



なぜ作品
「氷菓」を
書こうと思われましたか。

特に変わった理由はありません。次ほど学生時代（子どものころ）に想像していらっしゃいましたか。

「なりたい自分」になれましたか。

小説家であるかどうかはわかりませんが、お話を作る仕事には就くだらうと考えていました。「なりたい」というのは、少し違います。「なるだろう」と思っていました。

「氷菓」はどういう思いで書き始められましたか。

元々は習作です。小説を書く技術を磨くために書き始めました。その後、出版社主催の新人賞に投稿するため、加筆修正をしました。

なぜ自分の学校をモodelにしようと思われましたか。

小説を書く都合上建物の構造は把握しないといけないのですが、まったく新しく学校の構造を創作するより、知っている建物を用いた方が遗漏がないからです。

オーラのある方で頭の中にはすごい世界が広がっているのかな…と思いました。当日は私たちに対するお話などもしてください、遠いようで近い存在のような感覚も覚えました。

今回、私たちの質問に対するお答えの中では、「小説家に『なりたい』というよりは『なるだろう』と思っていました」というところは、なぜ思われたのか不思議に感じました。米澤先生は高校時代に、部活やアルバイトをやって私たちと同じような生活をしながら、時間を見つけてお話を書いていらしたというところから、小説に対する思いがすごく強かったんだろうなと思いました。勉強だけでなく部活や好きなことでも続けることで、何か将来につながることがあるのかもしれないと思いました。今はまだやりたいことが明確にあるわけではないけれど、小さなことを毎日少しずつ積み上げていきたいです。

作家になつてよかつたと思われますか。

仕事をですので、あまりそういうことは考えません。作家でなければ、何か別の形でお話を書いていたと思います。とはいっても作家という職業はお話をあって生きていくのに好適な職業ではありませんから、そういう意味ではよかったです。

ありがとうございました

米澤穂信先生



斐太高等学校 生徒の皆さん
後列左より 新屋一樹さん(2年)・岩腰丈太朗さん(3年)
前列左より 門春佳さん(2年)・大田結心さん(2年)